

## はじめに

山下 孝\*

今回は、2017年の学会などで発表されたものの中から、放射線治療で最近話題になっている5つのテーマを取り上げた。いずれも、現状に至るまでの経緯もエビデンスを示しながら述べられているので、分かりやすいものになっているが、それぞれの論文についてコメントを加えて序文に代えたい。

まず、脳腫瘍の放射線治療分野に造詣の深い新潟大学の青山先生による「転移性脳腫瘍の治療法」は、臨床で遭遇することの多い転移性脳腫瘍の放射線治療に関して、現状の流れを把握するうえで、役に立つものである。知っておくべき論文の紹介だけでなく、論文に対する著者の考えを述べた総説になっているので、読みやすい。また、著者自身の自説を示しながら、それぞれの症例に対処できる日常臨床に役立つ内容となっている。

2番目は、子宮頸癌の放射線治療の第一人者である戸板先生の「進行・再発子宮癌に対する放射線治療の役割」であり、臨床病期分類の新しい動きの紹介から始まって、リンパ節転移への放射線治療医としての対処の仕方を述べ、最後に再発・子宮癌を取り扱う際に注意すべきことが記されている。外科治療で、制御できない進行・再発癌に対して、放射線治療により治癒できる症例があることを示していることが重要である。進行・再発

癌に対する化学療法は、決して治癒が得られる治療法でなく、一時的緩解しか得られないので、安易に緩和治療効果しか得られない化学療法にゆだねるのではなく、治癒が期待できる放射線治療を婦人科医に今後も提示すべきであろう。

3番目は、小児がんの放射線治療について、この道に詳しい副島先生が、小児がん放射線治療の特徴をまず述べて、代表的小児がんについて、臨床研究グループの動向を示している。小児がんの患者数は少ないが、小児科診療をしているどこの病院でも遭遇するので、このような総説は第一線の臨床放射線治療医にとって役立つものである。とくに、これからは小児がんに対する放射線治療は二次発がんなどの晩期合併症を減ずる目的で、陽子線治療を用いることが多くなるので、最新の放射線治療機器のない施設では、安易に小児がん患者の放射線治療をせず、陽子線治療施設がある病院に放射線治療をまかせ、治療を集約化する必要がある。

4番目は核医学領域で話題となり、急速に利用され始めている骨転移に対する塩化ラジウム（商品名ゾーフィゴ）の論文であり、実際に治療を始める施設の手引書として役立つ。この治療法は、泌尿器科医、核医学医そして放射線治療医が中心となって、診療放射線技師や看護師の助けを借り

\* 公益社団法人日本アイソトープ協会

索引用語：放射線治療、転移性脳腫瘍、子宮癌、小児がん、Ra-223、免疫放射線療法

て進めていく新しい治療方法で、他の疾患にも応用されうる今後の展開が期待される治療方法である。

最後となる5番目は、わが国で「放射線治療と免疫」に継続的に取り組んでいる群馬大学の吉本先生がまとめた「免疫放射線療法」で、現状を網羅してよく調べている。最近はリンパ球移入療法などのまだ効果があるとはいえない治療方法が、大学病院などでも始められて、問題となっている現状を考えると、免疫療法の臨床研究は慎重に進

めていかなければならない。とくに、最近は、アブスコパル効果という言葉が安易に用いられているので、注意が必要だろう。

以上、今回紹介した5つの論文は放射線治療医だけでなく、画像診断を主にしている画像診断医も知っておくべき事項と思われる。

### **Foreword**

*Takashi Yamashita*

*Japan Radioisotope Association*